

# 拉致事件の功と罪

大前 繁雄

昨年9月17日、小泉総理が訪朝され北朝鮮の金正日総書記とのトップ会談で初めて拉致の事実が認定されて以来、早や半年が過ぎようとしている。

思えば私が県会議員在職中の平成8年12月、全国の議会に先がけ、初めて有本恵子さん、田中実さんという、兵庫県出身の被拉致者の問題を提起した時の、議会の反応はまことに冷たいものであった。旧社会党系など北朝鮮と親交のある会派からは、「デッチあげだ」とか、「ミステリーじみたいい加減な話をするな」、といった罵声を浴びせられたほどである。それがやっと真剣に議論されるようになったのは、翌平成9年に入って、国会で横田めぐみさんの拉致問題が明るみに出されてからである。

以来、被害者家族の方々が「家族会」を結成される一方、それを支援する形で全国に「救う会」が結成され、街頭署名活動などが展開されたが、当時は国民の反応も薄く、マスコミの報道も極めて低調であった。

ところが日朝トップ会談、横田めぐみさん、有本恵子さん等8名死亡、生存者は未確認だった曾我ひとみさんを含めて5名のみという悲惨な結果が伝えられると、日本国中、悲しみと怒りで沸き立った。それまで私たちが支援集会を開いてもほとんど報道しなかったマスコミが、手のひらを返したように連日、洪水のようにこの拉致問題を取り上げ、世論も左右を問わず北朝鮮非難の大合唱となり、街頭活動をしていても沢山の方が署名の列に加わって頂けるようになったのである。

先日も大阪の千里中央駅前で、「救う会大阪」のメンバーと一緒に街頭活動を行っていた時、マイクを持つ私の前で一人の若い女性が、何か探しものをするようにキョロキョロ周りを見回しておられた。私が「どうかされたのですか」とたずねると、小さな声で「あの一、募金箱はどこにありますか」と言われたので、「あ一、募金箱はそこにあります」と指さすと、その女性は恥ずかしそうに財布からお金を出して、その箱に入れて足早に立ち去られた。その時チラッと私の目に入ったのが、色の濃いお札のようだったので、あとで仲間と一緒に箱の中をのぞくと、何と一万円札だったのである。

その女性は20才前後で、身なりもそれほど立派ではない学生さんかOLさんのように見受けられたが、この不景気の最中、お金が欲しい盛りの若い女性

が一万円もの大金を、ポンとカンパする姿にびっくりさせられるとともに、この拉致問題に対する日本人の関心の高さ、とりわけ若者の意識の急激な変化を目のあたりにし、一種の感動を覚えたのである。

拉致された被害者の方々やそのご家族の方には大変お気の毒なことであるが、一方で、この拉致事件が近年、自分のことしか考えないと批判されることの多い日本の若者に、他を思いやる心を蘇らせ、大変好ましい精神作用を及ぼしているのを見る時、必らずしもその犠牲が無益の面ばかりでないことが分かったのである。

さらに9月17日をきっかけに、連日テレビや新聞が北朝鮮の悲惨な地獄のような暮らしぶりを報道しているが、私たちのすぐ近くにそのような極貧に苦しむ人々が存在するのを知ることは、日頃不平、不満の多い日本の若者たちに改めて、自分達がいかに恵まれているかを認識させるのに役立っている。

拉致に「功」の面があるというには余りにも悲しく、腹立たしいことで憚られるが、しかしその尊い犠牲が、日本の前途を担う若者の精神の覚醒に寄与してくれるのであれば、いく分かでも救われる思いがするのである。

この上は、亡くなったとされる方々が今なお生存しており、今回消息が伝えられなかった田中実さんなど沢山の拉致の疑いのある人達とともに、全員帰国する日のやってくることを固く信じ、これからも息の長い救援活動を行きたいと思う。

平成15年3月15日 西宮和歌山県人会便り